

現代文読解—論説文・評論文・説明文・論理的随筆

- 現代文読解には、文法（主語・述語の対応。接続詞の働き。修飾語・被修飾語の関係が最重要。）と、語彙（近代・身体・神・ヨーロッパ・絶対と相対など最低 200 語くらいの詳しい意味とイメージ。）が知識として必要です。そして、読む力、読むテクニック。最後に、設問に慣れ、問題の解き方を知り、問題を解く。

この基礎→解くまでのどの段階が抜けても、得点することはできません。

- 言葉（語）が文を作り、文が段落を作り、段落が文章をつくる。つまり、文と文が互いに関係をもつことによって、文脈を作る。文がいくつかまとまって＝小主題＝段落となる。段落がまとまって＝主題＝文章となる。

■ 段落

- ・ 形式段落＝改行されて一字下げて書き始められているところから、次の所までのまとまり。
- ・ 意味段落＝形式段落どうしの意味のつながりを考えて、段落をさらに大きなグループに分ける。

➤ 論説・評論のパターン

- ・ 2 段型
 - 本論・結論
 - 結論・本論
- ・ 3 段型
 - 序論・本論・結論
 - 結論・本論・結論（これは分かりやすい。小論文はこれで書け。）
- ・ 4 段型
 - 起承転結
 - 序論・説明・強調・結論

■ 文と文の接続

- ・ 順接 前の文を受けて、後の内容が書かれる。
 - だから・したがって・こうして・それには
- ・ 逆接 前の文と、後の文が、反対の内容となる。
 - しかし・けれども・だが・ところが
- ・ 添加 前の文に後の文で内容を付け加える。
 - そして・つぎに・それから・また
- ・ 対比 前の文と後の文を対比させる。
 - むしろ・まして・一方・それに対し・逆に
- ・ 転換 前の文とは別の内容を後の文に書く。
 - ところで・さて・ともあれ
- ・ 同列 前の文と同等の内容を後の文に書く。
 - すなわち・つまり・要するに・たとえば
- ・ 補足 前の文の内容を後の文で補足する。
 - なぜなら・というのは・ただし・もっとも・ただ・なお

■ 作者の主張はどこに現れるか

- ・ 断定的な言い切り
 - 必要だ・はずだ・べきだ・ではないか
- ・ 逆接の接続語のあと
 - しかし・けれども・だが・ところが
- ・ 強調の言葉
 - 特に・最も・なにより・決して・真の・本当の・当然・本質は
- ・ 理由を示すことばに注意
 - ～から・～せい・～ので・～わけ・～ため

■ 論理的文章の読み方（論説・評論・説明文）

1. 問題用紙全体を見る。「評論・小説・俳句・漢文・漢字だな。大体の時間配分は...」。時間配分と解く順番を考える。見直し時間は最低5分とっておく。
2. 分かる問題、得意な問題から解く。
3. 問題文を読む前に、設問を読む。ただし、選択肢内容は読まないこと。まず、どんな種類の問題があるかつかむ。

例えば、空欄補充問題で漢字や接続詞など10字以内の選択肢であれば読んでもいい。しかし、「筆者の主張に合うものを選び」などの長い選択肢は読まないようにする。理由は、選択肢を読んでいるうちに、知らず知らずのうちに問題文に対する先入観（思いこみ）ができてしまう。これは間違いの元。

もし、どんな種類の問題があるかを知らないまま、問題文から読み始めてしまうと、「漢字の誤りを正せ」「文章を正しい順番に並び替えよ」「脱文挿入」設問の場合、最初からまた全部読まないと分からないといったことになってしまう。

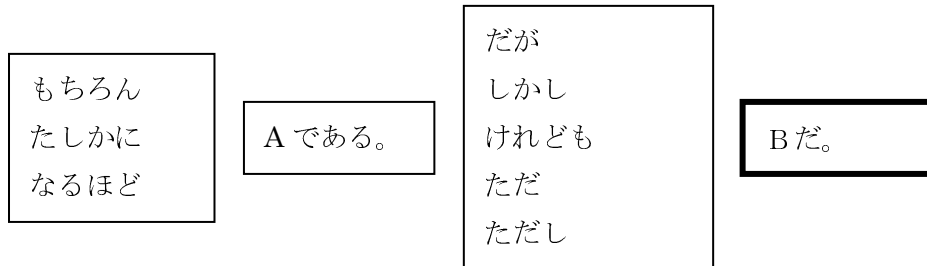
4. 問題文を読み始める。まず、最終の2段落をよむ。ここに、結論がある割合は7割である。次に最初から読んでいく。設問で問われている傍線部前後に特に注意する。傍線部前後は記号法をつかって、気になる用語や指示語（あれ、これ、それ・・・）が出てきたら、内容を確認して線を引いておく。答えとなる言葉が隠れている可能性が高い。
5. 分からない部分は、飛ばす。難しい言葉というのは、解答するのに必要のないことが多い。それより、設問を解くのに時間を残そう。
6. 傍線部がなく、具体例が書かれている部分（「たとえば」という接続詞の後が多い）は重要ではない。筆者の主張（抽象的）をより読者に強調するために、具体例を挙げている。だから、出題のポイントは抽象的な部分にある。
7. パターンに当てはめてみる。パターンの例としては、「現在はダメだけど、昔はよかった」「西洋はいいけれど、日本はダメ」「よく考えてみれば、常識は間違っている」「日本の自然、日本語は美しい、伝統はいい、昔はよかった」「中世（神）と近代（科学）」「都市と田舎」「物質と精神」など。これらは、日頃から論説的文章の問題集などを解いて、解説を読み、出題されるストーリーのパターンを知識として身につける。
8. 筆者の主張がわかったら、設問を解くために読む。接続詞と指示語の指す内容に注意して論理的なつながりをとらえる。つまり、他の部分で同じ内容を言い換えていないかどうか、に注意して読んでいく。
9. 各段落の役割を考えて、段落の意味を考えながら読む。抽象的なことを言う段落と具体例という段落。また、導入・権威あるものの引用などの段落。一つの段落はだいたい1～2つの役割を持っている。
10. 空欄補充問題、脱文挿入問題は先にやってしまうとよい。最後に「筆者の主張」問題を考えた方がいい。
11. 設問を解く中で、何度も本文の同じ部分を問われることがある。そのときは、設問がお互いにヒントになることが多い。設問内容をよく読んで、何を問われているかに線をひくこと。

■ 譲歩

(例文)

専門家にしか直せない物ほど、進歩的で価値があると思いがちだ。もちろんその考えもあながち間違いではない。だが、素人にすぐ直せるような物を軽く見るようになると間違ってくる。
(『障子の破れに学ぶもの』より)

(パターン)



A：作者の考えから一步譲って、常識的内容を述べる。

B：作者の本当に言いたいことが述べられる。

(譲歩の役割)

作者が書きたいことが、読み手にすんなりと受け入れられにくいと作者が感じるとき、譲歩の形をとる。常識に反するような内容（＝評論文によく出てくる内容）によく使われる。違う立場に歩み寄って話を進めたあと、自分の言いたいことを述べることで、**反論・反駁を防いでいる**のである。日本人らしい言い回し。

(例の文章の読解)

『「もちろん」～「だが」～。』の形なので、「だが」以下に注目する。すると、「素人にすぐ直せるような物を軽く見るのは間違いだ」というのが**作者の主張＝問題で問われる内容**であることが分かる。

以上

参考文献：

ミスター岡井の点取れ現代文 [書籍] / 著者 岡井光義. 駿台文庫, 2000.

新総合国語便覧 [書籍] / 著者 稲賀敬二ほか監修. 第一学習社, 1991.